

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	陳 婷 婷
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
環境マネジメントと経済パフォーマンスの関係に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	早瀬	光司
審査委員	教授	西村	雄郎
審査委員	教授	高谷	紀夫
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、環境マネジメントと経済パフォーマンスとの関係をテーマに、環境マネジメントの指標として日本経済新聞社環境経営度調査を、経済パフォーマンスの指標としてR&I信用格付けを採用してパス解析を行い、利益剰余金比率が重要な鍵となることを見出し実証的に考察したものである。</p> <p>本論文は7章からなる。</p> <p>第1章では、地球環境問題に対処するため、経済と環境の両立を求める新たな経済システムの革新（進んだ環境経営）が必要とされていることを示した。</p> <p>第2章では、本論文が掲げる三つの目的の学術的重要性を、実証データから提示した。第一の目的は、新たな企業規模指標の考案（第4章で議論）。第二の目的は、企業経営における環境マネジメントと経済パフォーマンスとの関係のパス解析（第5章で詳述）。第三の目的は、財務指標の一つである利益剰余金比率が、環境マネジメントと経済パフォーマンスに与える影響のパス解析と、その結果に基づく環境マネジメントに対する企業姿勢の分析（第6章で考察）である。</p> <p>第3章では、冒頭で示した実証データを採用することの有意性と、具体的な解析方法として、環境マネジメントと経済パフォーマンス、企業規模、財務指標の多変数間に自由な複数階層モデルの構築が可能なパス解析を用いることの有効性を示した。</p> <p>第4章では、売上高と従業員数はどちらも企業規模指標として適切か今まで不明であることに鑑み、本論文では売上高と従業員数の両者を包含する企業規模指標として、売上高と従業員数を標準化した数値の和「売従標準和企業規模」を考案した。「売従標準和企業規模」で解析した結果、これは単一的に有効な企業規模を表わす指標であり、売上高や従業員数をそのまま用いるより、有効な企業規模となることを明らかにした。</p> <p>第5章では、経済パフォーマンスを説明変数とし環境マネジメントを被説明変数とするモデルBの方が、その逆のモデルAよりも適合度指標が高いことを証明し、経済パフォーマンスを環境マネジメントよりパスの前方に配置する方が、営利事業を営むことを前提とした企業経営本来の姿が反映されていることを示した。</p>			

第6章では、まずモデルBでは利益剰余金比率から環境マネジメントに対するパス係数が負であることを確認した。そしてその結果から、余剰利益を多く所有しその蓄積を重視するが環境マネジメントへの取り組みを重視していない企業群（甲群）と、余剰利益が少ないが環境マネジメントを重視してこれに投資している企業群（乙群）という、二種類の「企業特性」を持つ企業群が存在することを導いた。甲群は、ポーター仮説を支持していない企業群、他方、乙群は、支持している企業群と考えられ、これら二種類の企業群の存在を初めて示した。またこれにより、ポーター仮説を支持する研究結果と支持しない研究結果が混在している理由を、初めて明瞭に説明した。

第7章では、総合考察を行い、今後、同様の研究が世界の企業群で行われて、本論文の結果と比較・考察されることが期待されることを述べた。

本研究では、「売従標準和企業規模」を初めて考案し、経済パフォーマンスを環境マネジメントよりパスの前方に配置するモデルBの優位性を示し、さらに重要な点として、余剰利益を多く所有しその蓄積を重視するが環境マネジメントを重視していない企業群（甲群）とその逆の企業群（乙群）という、二種類の「企業特性」を持つ企業群が存在することを世界で初めて示した。この発見は極めて独創的であり、非常に高く評価することができる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。